

楽 曲 解 説

【解説】 稲田 隆之(11/12・13)
松岡 由起(11/16)

11/12 第854回 サントリー定期シリーズ

11/13 第89回 東京オペラシティ定期シリーズ

11/16 第855回 オーチャード定期演奏会

オペラシティ

サントリー

ハイドン(1732-1809)

交響曲第6番 二長調『朝』

オペラシティ

サントリー

- I アダージョ——アレグロ(約6分)
- II アダージョ——アンダンテ——
アダージョ(約8分)
- III メヌエット(約5分)
- IV フィナーレ：アレグロ(約5分)

フランツ・ヨーゼフ・ハイドンは、100曲を超える交響曲を作曲し、「交響曲」の基本となるかたちを整えたことで知られている。ハイドンがこれほどまで多くの交響曲を作曲できたのは、パトロン存在によって作曲の機会に恵まれたことによるが、数の多さの理由はそれだけでは説明できない。むしろ重要なのは、当時の交響曲は再演されることがほとんど想定されていないことにある。つまり当時の聴衆は、そのつど新しい交響曲と出会い、作品ごとの魅力を単純に楽しんでいた。作曲家もまたそんな聴衆を楽しませるために、さまざまな工夫を仕掛け、次々に新作を生み出していったのである。

いまやクラシック音楽は堅苦しいものになってしまっているかもしれないが、ハイドンの交響曲は——作曲技法は高度

であっても——決して堅苦しいものではない。ぜひ、ハイドンによる音楽の楽しい仕掛けを見つけてみたい。本日その楽しみを引き出してくれるのは、もちろん指揮者とオーケストラである。

本日演奏される交響曲第6番『朝』は、ハイドンによる交響曲のなかでは最初期の作品に当たる。1761年にハイドンは、西ハンガリーの貴族ニコラウス・エステルハージ侯爵が抱える楽団の副楽長への就任が決まり、その最初の作品として第6番『朝 *Le Matin*』、第7番『昼 *Le Midi*』、第8番『夕 *Le Soir*』の3つの交響曲を作曲した。6から8の番号は後世が与えたものだが、フランス語によるそれぞれの副題は作曲当時に与えられている。

ハイドンが第6番『朝』を含む3つの作品を、どこまで「交響曲」というジャンルとして意識して作曲したのかどうかは疑わしい。いずれも古典的な4楽章構成をとるものの、音楽の内実ではバロック音楽の様式が色濃く残っており、イタリア・バロックのコンチェルト・グロッソ(複数の独奏者による協奏曲)を新しい時代の

テストで作曲した作品になっている。バロック音楽特有の強弱のコントラストが意図されているほか、楽団の優れた奏者たちの技巧が十二分に発揮される作品になっている。何より、パトロンや楽団員を喜ばせたいというハイドンのサービス精神に溢れている。なお副題がフランス語で書かれ、音楽様式がイタリア風なのは、当時の音楽文化の流行が反映されたものだろう。

第1楽章は夜明けを想起させるような序奏で始まったのち、3拍子の軽快な主題がさまざまな楽器に引き継がれながら、ソナタ形式（提示部—展開部—再現部の

3部分からなる形式）をかたち作る。再現部の前、ホルンが2小節早くフライングする、という仕掛けが面白い。**第2楽章**はヴァイオリン独奏が活躍する緩徐楽章。**第3楽章**はメヌエット—トリオ—メヌエットの3部分のコントラストが意図されている。管楽器が活躍するメヌエットは古典的な響きによるが、一方中間部のトリオは短調をとり、ファゴットと弦楽器によるバロック的な響きになっている。軽快な**第4楽章**は、独奏群とオーケストラ、強と弱によるめまぐるしいコントラストが楽しめる。

[楽器編成] フルート、オーボエ2、ファゴット、ホルン2、弦楽5部

ブルックナー（1824-96）

交響曲第4番 変ホ長調『ロマンティック』

オペラシティ

サントリー

- I 躍動的に、速すぎずに（約21分）
- II アンダンテ・クアジ・アレグレット（約15分）
- III スケルツォ：躍動的に（約11分）
- IV フィナーレ：躍動的に、しかし、速すぎずに（約23分）

ハイドンのおよそ100年後、ウィーンを中心に活躍したアントン・ブルックナーは、いくつかの宗教曲のほか、多少の例外はあるものの、もっぱら交響曲の作曲にこだわった特異な作曲家である。典型的な大器晩成型で、番号なしの最初の交響

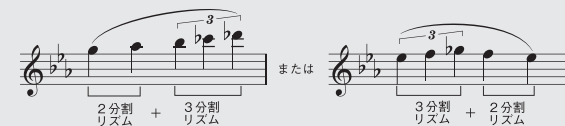
曲を完成させたのは39歳のときだった。以後、中断なく次の交響曲に着手し、番号付きでは9曲の交響曲を残した（ただし第9番は未完）。また番号の若い交響曲に対しては、晩年に至っても根気よく改訂を施しており、各作品にいくつかの「稿」が存在することはよく知られている。本日演奏される第4番『ロマンティック』もそうした作品のひとつである。

ブルックナーが自作に改訂を重ねた理由には、まずは自作を演奏してほしい、そして聴衆に受け入れられたいという願いがあったにちがいないが、それ以上に、

● 譜例1 第1楽章第1主題冒頭



● 譜例2 ブルックナー・リズム



完璧な作品を残したいという強い意志によるものだろう。それほどまでに彼の交響曲には、交響曲というかたちでしか表現できない確固たる理念があった。その理念は作曲家自身が言葉で語らなくても、音楽がはっきりと語っている。すなわち、後期ロマン主義の視点から捉えた、完全なるもの——神や宇宙——の讚美にほかならない。

さて、ブルックナーの音楽は、一度その魅力に捉われると離れがたくなるが、慣れない耳にとっては戸惑うことも多いかもしれない。もし戸惑うとすれば、それは古典的な音楽のかたちや響きから逸脱しているためである。その最たるものが旋律だろう。旋律はいわば音楽の華である。しかしロマン主義時代の作曲家にとって、旋律はアンビヴァレントな存在になっていた。美しい旋律に憧れながら、もはやそのような旋律を単純に書くことのできない時代において、ブルックナーはおよそ流麗とはいえない武骨な主題を置いた。その主題の骨格となっているのが、完全なるものを暗示する完全音程（完全8度、完全5度、完全4度）である【譜例1】。こうした完全音程と音階音を組み合わせながら旋律を彫琢し、綿密な動機操作を駆使していく。

また古典派の音楽やそれを引き継い

だロマン主義音楽では、聴衆にある程度展開を予測させながら、クライマックスをかたち作っていた。しかしブルックナーは音楽的な結論を先延ばしにし、半音階的な転調を介しながら、延々と語り続ける。聴き手は、いつ終わるとも知れないような展開に身を委ねるしかない。確かに途切れ途切れに紡がれる音楽だが、それは着実に結論に向かっている。ブルックナーの交響曲の醍醐味は、各楽章の結尾にはっきりと音楽的な結論が用意されていることにある。ぜひそれを味わってほしい。

そのほかブルックナーの音楽の特徴として、ブルックナー・リズム【譜例2】がある。そもそも、音楽の拍節を3分割するリズムと2分割するリズムは、中世以来、音楽的な対立を形成してきた。あるときは具体的な象徴内容の対立であり、あるときは単純に響きの対立であったりする。いずれにせよ相反する要素が並置されたこのリズムには、何らかの表裏一体性が暗示されているだろう。とりわけ第4番『ロマンティック』は、ブルックナー・リズムを徹底的に用いた成功例である。ブルックナー・リズムによる旋律がどのように組み合わせられていくのかも、注目したい。

交響曲第4番は作曲家自身が付けた『ロマンティック』の副題のおかげもあり、彼の交響曲のなかでは最も親しまれて

いる作品だろう。ブルックナーは1873年の年末に、敬愛する作曲家ワーグナーに捧げた交響曲第3番を完成させると、翌年すぐに第4番の作曲に着手した。完成は1874年の11月である。しかしこの「1874年稿(第1稿)」は、初演の機会には恵まれなかった。その後、第2番の賛否両論の初演、ウィーンでの職探し、76年の第1回パイロイト祝祭への訪問などを経て、第4番の改訂作業に入った。

改訂作業の開始時期について詳細は不明だが、第3楽章が新たに書き直され、1878年12月には新しい第4番が完成した(第2稿)。さらに1880年には、第4楽章の再改訂に取り組んでいる。現在一般に流布している交響曲第4番のかたちは、1878年に完成された第1～3楽章と1880年に完成された第4楽章を組み合わせた「1878/80年稿」で、本日演奏されるのもこのかたちによる。これらの改訂により、作品全体から冗長な部分が削除され、演奏困難な楽句についても修正が施された。フレーズ構造も整えられ、全体に聴きやすい作品になっている。初演は1881年2月20日、ハンス・リヒター指揮のウィーン・フィルにより行われ、ほぼ成功裡に終わった。

第1楽章は3つの主題によるソナタ形

式(提示部—展開部—再現部の3部分からなる形式)をとる。弦楽器のさざめきのなかから浮かび上がる第1主題【譜例1】が全体を統一するほか、ブルックナー・リズムも多用される。

第2楽章は森閑とした雰囲気のある緩徐楽章だが、随所で葬送行進曲風の響きが支配的である。終わり近くでかたち作られるクライマックスに対しても、葬送行進曲が影を落とす。

第3楽章は主部—中間部—主部からなり、ブルックナーの交響曲のなかでは唯一2拍子によるスケルツォである。作曲者自身「狩りの主題」と記したように、ホルンによるシグナル音型が特徴的で、ここでもブルックナー・リズムが基調となっている。中間部は3拍子のレントラー(南ドイツやオーストリアの民族舞曲)で書かれている。

第4楽章は再度、3つの主題によるソナタ形式をとる。得体の知れない巨大なものを感じさせる第1主題、葬送行進曲風の第2主題、のどかな第3主題によって展開される。最終的に、第1楽章第1主題【譜例1】による高らかな勝利が全曲をとりまとめる。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、弦楽5部

いなだ・たかゆき(音楽学) / 香川大学准教授。ワーグナーの『ニーベルングの指環』におけるライトモチーフ技法研究で博士号取得(東京藝術大学)。近年は、ワーグナーを中心に、ロマン主義音楽における言葉(ひいては詩的なもの)と音楽の関係、および作曲技法、創作理念と聴衆の関係について研究。